

## 態度価値と責任性存在

大 森 正 樹（南山短期大学助教授）

オーストリアの精神医学者、フランクル（Viktor E. Frankl, 1905～）の著書、*Aerztliche Seelsorge*（邦訳：死と愛－実存分析入門、霜山徳爾訳）で用いられた言葉。フランクルはユダヤ人であるため、ナチス・ドイツにより、それまでの幸福な生活から一転して、強制収容所の悲惨な生活の中に投げこまれた。ここでの体験とそれまでの彼自身の病者との関わりから人生の意味や、価値を見いだしていくことによって、病者を癒しに導く精神療法（ロゴセラピー）を提唱した。彼はフロイトに師事しながらも、フロイトの生物学主義とは明確に一線を画している。即ち、フロイトのように、すべてを性に還元するのではなく、むしろ生のさなかに色々の意味や価値を見いだしていくことを強調する。意味や価値を求める人間に、真の人間の姿を見ようとする彼の意味と価値への志向は、一種、強烈なまでの迫力をもっている。ファナティックとも言われる所以である。

### 態度価値

どの人間もそれぞれの独自性を持っているが、個々の精神状況によっては、自己の存在の意味を疑うようなこともありうる。つまり一種のニヒリズムに陥れば、自分が生きているということに何の価値も見いださないことが生じる。このような根本的な価値への懐疑にたいして、フランクルは人間には豊かな価値の世界があることを説得しようとした。それによると、彼は価値を三つの範疇に分けている。一つは、創造ないし活動の中に実現される「創造的価値」、二つは、体験の中に実現されるような「体験価値」である。これは例えば、美しい自然を見たり、素晴らしい芸術作品を感動してみたり、聞いたり、あるいは

はほんの一瞬の間に経験するある感興でもよい。要するに、活動ではなく、純粋に受動的な状態で味わうような価値である。

ところが、最後にくる価値は、以上のものとはやや異なっている。即ち、第三のものは、「態度価値」とよばれる。これは、「人間が彼の生命の制限に対していかなる態度をとるかということの中に実現化」するような価値である。それは、「人間の生命は、たとえ創造的に実り豊かでもなく、また体験において豊かでもなく、根本的にはまだなお有意味でありうる」からである、とフランクフルは言う。そして、このような価値実現の可能性が狭められているということに対し、人間がどんな態度をとるかということは、非常に重要なことであり、これこそ最高の価値に属する、とさえフランクフルは言う。苦悩のさなかにあつて、常識的には、あるいは一般的に、何も価値を実現する可能性のないと思われる領域にも、なおも価値実現の余地があるということを示すことにより、フランクフルはニヒリズムから人間を救おうとしたのである。

ところで、彼があげている一つの例をここでも取り上げてみよう。それは手術不能の脊髄腫瘍のために入院している青年の話である。彼は麻痺現象のために創造的価値を実現することはもはや不可能であった。しかし彼はこうした状態でも、他の患者と精神的に優れた話をしたり、よい本を読んだり、ラジオで美しい音楽を聞いたりして、体験価値を実現することは可能であった。しかし、段々と麻痺が進行して、手で本をもてなくなり、耳にレシーバーをかけることにも耐えられなくなってきた。そこで彼はどのような行動をしたのであろうか。死の前日、彼は当直の医師が適時にモルヒネの注射をするのを頼まれているのを知り、この医者が午後回診にきたときに、注射を夕方にするよう頼んだ。それは夜になって、この医者が起こされないように配慮したためであった。こうして彼は態度価値を実現したのである。(以上、邦訳 p.51-57.)

このように態度価値は「いかに人間が変更し得ないものに対処するかということの中に」実現されるのであって、「態度価値の実現の前提は実際に変更しえないものが問題であるときに存する」(邦訳 p.128) ののである。だから、これは変更しえない、何か運命的な状況の只中であつて、耐えることもある意味で「業績」であると考えてはじめて理解される価値である。それは苦悩を積極的に評価することである。

それゆえ、また、次のような例も態度価値を指し示すものとしてあげられるかもしれない。つまり、難破しかけた船の船長はボートにあと一人乗れるという時、他人にその機会を譲り、自分は沈みゆく船に残るとしよう。この決定をしようとする時、大いなる苦悩が船長を襲うであろう。しかし、単なる義務感からではなく、ひとりの人間として、この決断を下す船長はこの価値を実現したのである。

あるいは、人の代わりに見せしめの刑を引き受けて、アウシュビッツで亡くなったコルベ神父もこの価値を実現した人であろう。

実際問題として、どこからどこまでが体験価値で、それ以後が態度価値であるかを指摘することは大変難しいし、またそうしたところで何の意味もないと思われる。大事なことは、人間はどのような状況にあっても、価値を実現する可能性をもっているということであり、そこにこそ人間の尊厳性を見ようとしていることであろう。機械化と工業化の世界にあって、ますます人間の進むべき方向が不確かなものとなっている現在、 فرانクルの述べていることは、時として現代人にはハードな課題のようにみえるが、考えるべき道を我々に示してくれるように思える。

### 責任性存在

フランクルは精神分析的心理学の知見に基づいて、そしてまたこれを越える試みを通して、人間存在の根源的基盤を意識性と責任性に置く。それ故、人間は意識性存在であり、また責任性存在である。しかし、彼によれば、精神分析は人間の無意識層を探って、意識の面には焦点を絞るが、責任の面にはあまりかかわらないと言う。しかし人間はすべて他者との関係の中で生存するものであるから（人間は関係存在である）、責任性の面に目をむけないかぎり、真の意味での病者の治癒にも成功しないのである。というのは、責任は常にある義務に対する責任であるが、この義務はある意味、即ち人生の意味から理解される。それは個々の人間の具体的な生から生ずる意味であり、他者（他在）との関係の中でおりなされる色模様である。

人間は自己の人生における責任を自覚し（意識化する）、それを果していくことによって、本来の生を生きることができるのである。

ところで、この責任という言葉に少し注意を向けてみよう。因みに、辞典によると、次のように書いてある。責任とは、「責めを負ってなきべからぬ任務。引き受けてしなければならない義務。」（小学館、国語大辞典 より）である。このような説明を聞いて感ずることは、責任を持つということは、じつは大変なことだということである。出来うればなるだけ責任は持ちたくない、というのが正直な感想ではないであろうか。責任という字、その説明から以上のような気持ちを持つのは当然といえよう。しかし、フランクルのいう責任はどうもそのような意味ではないようである。というのは、責任という日本語にあたるドイツ語は、Verantwortung という。英語では、これを responsibility という。Verantwortung にみる antwortung は、antworten という動詞に由来するが、その意味は「答える、応答する」ということで、英語の方は、response 「応答、反応」という言葉がみえ、これはラテン語の respondere 「お返しに差し出す、答える」という動詞にこれまた由来する。以上いずれも、応答とか、答えるといった意味が含まれているのに気がつく。しかし、残念

ながら日本語の「責任」には、応答という意味は含まれていないと思われる。それ故、責めを負うということばかりに重点が置かれ、なんとも重苦しい感じを与えているように思う。勿論、義務を果たすということは、なかなかむづかしいことであって、確かに安易な態度は慎むべきであろう。しかし、ここでいう責任はもっと積極的なものであって、この人生の中で人はそれぞれの状況において、何らかの呼びかけを受けているのであり、それに答えるべく存在しているのである。その呼びかけは具体的な隣人のものかも知れないし、辿るべき道を指示するものかも知れないし、人間ならざる絶対者かも知れないし、また既に呼びかけられているのに、気づいていない場合もありえよう。いずれにしても、各人がその人生を送っていく時に、絶えず何らかの呼びかけに、その都度、答えていくことに変わりはない。人生の途上で人が必ずなさねばならない行為、それこそが責任なのである。それは重苦しいものではなく、自分の道を示してくれるものとして、むしろ喜びに満ちたものであると言わねばならないであろう。

更にフランクルの言葉に従うと、この責任性は「常に価値の実現化に対する責任」(邦訳 pp.119-12)ということになる。それゆえ、この価値は実は普遍的な価値のみならず、各人の具体的な価値をも意味するのである。つまり、各人の各時間ごとの具体的な状況の中で各人が何をどのように行なうかが問題なのである。先に「呼びかけられて」と言ったのはその意味においてである。換言すれば、これは各人の「使命」をいかに果たすかといった問題になっていくのである。それではこれについて最もきわだった例と思われるものを、次にあげてみよう。

これは犬養道子さんの書いた記事に出てくる話である。犬養さんが米国留学の時に結核サナトリウムに入院を余儀なくされた時、毎日の悶々たる生活の中で、ふと手にした一冊のガリ版刷りの小冊子に始まる強烈な出会いである。それは、病院で暮らす患者を対象として作られた雑誌で、J. とう署名をした編集者のユーモアに満ちたエッセイが、当時病床に伏せていた犬養さんの暗い心に灯をともし、己一人の不幸にかまける弱い心を奮い起こしたのであった。

そのうち、この雑誌に投稿するようになり、J. からは颯爽としたアメリカ人を思わせるような返事が届いた。しかし、その文末の署名がひどく震えているのが気にはなった。その後も、彼の手紙は、淋しい時や、心の重い時に勇気と希望を与え続けた。J. は自分では彼女を見舞うことができないので、友人に行ってもらおうと言ってきた。やってきたのは司祭であった。彼の話聞いた時、彼女は仰天してしまった。J. はポリオに蝕まれた重症の身障者であった。口をのぞいては首も手足も動かさぬまま二十数年を過ごした。また身寄りも金も無かった。施設の大部屋の片隅に横たわって、心臓発作の激痛に耐えているのだった。施設で働く人が、いつごろからかJ. を中心に集まって、彼の口述を巻頭文にする印刷を始め、囚人や身障者の施設、サナトリウムに送った。J.

は口にペンをくわえて、最も淋しい人たち—囚人—にクリスマス・カードを書いたのであった。その後しばらくしてJ. は亡くなった。

司祭が来た時、こう言った。ベルーフという言葉を知っているか。それは使命を生きる人、招かれた人という意味である。苦痛の限りを身に受けて、尚それを越え、それから出ていき、与えられた心と知と才を使いを使って周囲に光をばらまく人、それがJ. という人である（『めぐりあい』 南山短期大学キリスト教概論資料より）。

責任とは何であろうか。このような例は我々の周囲にそうざらにあるものでも無く、また我々がこのような行為を十分に果たし得るとも考えられない。しかし、このような人間が一人でもいるということは、我々もまたそれぞれの場で自分の使命に答えて、責任を果たしていける可能性をはらんでいるということではないであろうか。

#### 参考文献

- フランクル著作集 全7巻 みすず書房 1978
- フランクル 『苦悩の存在論』 真行寺功訳 新泉社 1972
- 荻野恒一 『苦悩と不安』 川島書店 1969
- 荻野恒一 『精神病理学入門』 誠信書房 1964



フランクル 自画像

出典 『人間を考える』 育英倫理・社会研究会 昭47